

天城山慈眼院の歴史

鎌倉時代の末頃、正安年中（一二九九〜一三〇一）に天城山の本谷川の入り寺沢に、密教の僧性空阿闍梨（あじやりとは、密教伝授の資格を持った格式高い僧位のこと）が観音菩薩を本尊に、慈眼庵という草庵を建てて住んだ。

幾歳月を経て、江戸時代の中頃慶安三年（一六五〇）頃はこの堂は梨本村川久保に移され普門院三世雲国宗白和尚が開山として迎えられ曹洞宗に改宗、天城山慈眼院とした。明暦四年（一六五八）一月に本寺普門院が幕府に提出した文書に「慈眼院 御年貢地九斗七升 平僧」と書かれている。平僧とは檀家の葬式、人別印証のできない寺で、重要なことは本寺住職がなす寺格のことをいう。

享保一三年（一七二八）八月に普門院二十二世鉄外智見が川合野口に寺を移して法地（住僧が葬式、人別印証のできる寺格の寺）とした。

二世大麟和尚は、寺の過去帳を享保一三年より書き始めている。今から二百七十年以前のことである。

二十一世坪井彰雄和尚は昭和十一年四月より昭和四十年三月まで二十九年間小学校教諭を勤めながら寺の法灯護持のため努力した。昭和二十九年四月二十日には静岡県曹洞宗第二宗務所管内で初めの梅花講を創設した。また昭和三十八年十月より天城ハリスコートユースホステルを開設し天城街道をゆく人々、特に青少年にとって安心して泊まれる宿を提供し社会的貢献をはたした。また毎年四月二十一日の弘法大師の命日には近隣の人々を集め盛大に弘法祭を開催した。舞踊・福引等余興も取り入れ多くの檀信徒の信仰を集めた。また短歌に造詣が深く米寿の記念に私歌集『ハリスの塔』を刊行した。

二十二世坪井弘司和尚は天城ハリスコートユースホステルを経営し副住職として彰雄和尚を補佐し寺院運営に努力した。住職拝命後、時代の中でユースホステルの役割の変化、弘法大師祭運営の方向転換を迫られていることを痛感し、新しい寺院の果たすべき社会的貢献を模索していたところ

十三世行翁大周和尚の代、安政四年（一八五七）十一月二十三日下田駐在アメリカ合衆国総領事ハリスが宿泊した。ハリス日記には「行列の人数は全部で三百五十人。寺では湯殿と便所が私の専用で作られていて、私をころよくするために、万端の注意がはらわれているのを私は知った。」と寺の歓待ぶりが日記に書かれている。

大正七年（一九一八）十月調査の曹洞宗資料は「宅地百五十坪、田畑三反一畝二十八歩、山林二十九町三反六畝二十歩。」となっている。また慈眼院には稲葉寺の十王尊像と床浦神社の疱瘡婆神を合祀している。

当寺二十世坪井諦堂和尚は、下田市八木山新家の老人が四国八十八カ所巡礼のときに、霊場の本堂床下の土砂を現地から送ってもらった。この土砂を踏み八十八カ所を巡礼できない人々の代参をする方式の法要を始めた。大般若経六百卷（三百冊）をしづめ家の稲葉秀夫氏により寄附されている。弘法大師尊像も多数の信者の寄進で本尊前に祀られている。

境内地に掘削していた温泉が湧出した。

弘法大師が修善寺にて独鈷の湯を拓き修禅寺を興した大同二年（西暦八〇七年）より ちょうど千二百年目にあたる平成十九年四月二十一日念願が成就し境内に新しく温泉入浴施設【天城温泉禅の湯】が完成し落慶法要を営むことができた。

歴史を紐解けば既に聖徳太子の時代、経文に身体を洗い清めることの大切さが説かれ寺院には七堂伽藍の一つとして浴室が備えられていた。奈良の東大寺や法華寺には今も大湯屋や浴室が残っている。当事の風呂とは蒸気浴を意味し竈室や石室などの蒸し室に入るという意味である。古代中世を通じて寺院、幕府は社会事業として入浴を庶民に施した。風呂に入るとは七病を除去し七福が得られると説かれている。

慈眼院は現代において寺院本来の役割としての施浴を社会的事業と捉え、また『禅』の道場として心身の修業をしつつ檀信徒ほか多くの人々と共に今後進むべき方向を模索している。